

年越しそばと除夜の鐘

1

「おつ、鐘が鳴った」

ごうん、という音が聞こえて私は割り箸を割った。ばちん、と箸を割る音が部屋に鳴り響く。

私、この音好きなのよね。年越しそばはここ数年カップラーマンにしているのだけれど、別にこれくらいはどうだっていい。周りが何といおうとも私はこれがベストなのだから。

「……今年もお疲れ様でした」

両手を合わせて目の前のカップラーマンに頭を下げる。このことももう三年目になる。一人暮らしを始めてからの恒例行事になるけれど、別に悪くはない。

最終営業日は三日前、二十八日だった。名古屋の市街地にある企業で事務処理をずっと続けているわけだけれど、その会社でも案外ずっと続けていくことが

出来た。庶務自体は多いけれど、普通に定時で帰ることが出来るし、女子会も参加していて、なかなか平穏な毎日を過ごしている。

けれど、年末年始はここ数年一人で過ごしている。実家に帰る手もあるわけだけれど、実家まで新幹線の乗り継ぎで数万円かかることもあるし、そもそも親戚一同へお年玉を配ることを考えると私の給料では払いきれない。だから、毎年実家にだけお金を入れている。それで何とか了解を得ている。

まあ、実情はそろそろ彼氏の一人や二人くらい作れ、と親に言われたくないからなのだけれど。

「私だって彼氏を作ろうと努力はしているのだけれど」

言って、そばを啜る。

合コンにも、相席居酒屋にも行ってみた。けれど、私の好みの男性は見つからなかった。まあ、そんな簡単に見つかるとは思えないし、それくらい仕方ない話ではあるのかもしれないのだけれど。

テレビ番組はいつものバラエティ。タイキックを食らい悶える芸人を見て、思わず吹き出しそうになった。

そんなタイミングで、テーブルに置かれたスマートフォンが震えた。

スリープを解除すると、地元の友人からだった。

『お元気ですかー？ こっちは雪が降ってきました。』

マッキーは仕事が忙しいんだってね。大変だね。頑張ってるね。こっちは夫婦水入らずで旅行に行っています。』

最後にハートマークをたくさんつけて、おまけに夫婦仲睦まじい写真がLINEに送られてきた。

わざわざ仲がいい様子を送り付けてきたのか。何とというか、性格が悪い。そんなことを思いながら、私は直ぐにスリープ状態にした。

「今年も色々あったなあ……」

思い返すと、大変なことばかりだったので、あまり長い時間考えないようにした。

天ぷらそばを食べつつ、スマートフォンを見る。ちようど一年の振り返り記事みたいなものが投稿されているまとめサイトがあったので、そこを見ることにした。

今年は確かに色々あった。

きつと来年も色んなことが起きるのだろう。

そんなことを思いながら、除夜の鐘を聞いていた。

2

午後十一時五十五分。

残り五分になると、どことなくツイッターも重たくなる。聞いた話によれば、日本人のあけましておめでとうというツイートが世界でも有数の高トラフィック案件らしく、その期間中はどうも輻輳が発生するらしい。

「……あと五分かあ」

テレビでもカウントダウンをしている。紅白は今年も紅組の優勝で幕を閉じている。やっぱり、たまに聞く演歌はいいよねえ。バラエティと紅白をザッピングしていたわけだけれど、つついつい紅白に目がいつてしまふ。……出来ることなら、かのラスボスが出てきてくれればもつと良かった気がするのだけれど、それは放送局の都合があるのだろう。それについては、私はずかり知らぬ事情が働いているのだ。きつと。

カウントダウンが始まった。

「5、4、3、2、1……」

テレビに映し出されるゼロの文字を見て、私はテレビに頭を下げつつ、

「あけましておめでとうございます」

そう一言呟いた。

ちなみに年越しそばはとくに完食していて、もうゴミ箱に捨てている。それにしてもカップラーメンのスープって、どうしてああもご飯を投入したくなるような味付けなのかしら。まあ、それはきつと日本人の味付けに沿ったものとなっているからということと、カップラーメンのスープが濃い味付けになっているからなのだろうけれど。……体重は気にしない方向でスマートフォンのお知らせが聞こえて、私はスマートフォンを手取る。

メールが二通来ている。一通は知り合いから、もう

一通は……親からだった。

二通とも内容は共通していて、簡単に言えば年賀状のメール版みたいなものだった。そういえば今年も年賀状は出していなかったかな。まあ、別にいいのだけれど。

年賀状メールに返信をして、私は出かける準備をする。

このぼつち年末年始を始めてからというものの、年賀明けから直ぐ近所の神社に初詣に行くことになっている。明るいうちに行ったほうがいいのかもしれないけれど、それでも案外やってくる人は多いらしい。私みたいなせつちちな人間が多いのだろう。

ジャンパーを着て、私は外に出る。外はとても寒かった。道を歩くと私と同じように歩いている人たちを見かける。きつと向かう場所は同じだと思う。すれ違う人たちはきつと初詣を終えた感じなのだろう。……あまりにも早すぎる気がしないでも無いけれど。

神社に着くと、人は誰も居なかった。被らないタイミングだったのは大分有難い。別に、あまり人に見られたくないというわけではないのだけれど。

事前に準備しておいた五円玉を賽銭箱に入れて、二礼二拍手一礼。そして今年の健康を祈って、私は神社を後にする。

鳥居でカップルとすれ違った。マフラーを共有していて、見ていてとても理想的なカップルだと思った。

「……今年は、」

どんな年になるのかな。

まあ、そんなことはどうだっていい。

正確に言えば、私が良くなる年になれば、ほかはどうだっていい。

傲慢かもしれない願いを心の中で思いながら、私は帰路につくのだった。